

岡真理201407282355パレスチナフォーラム

京都の岡真理です。ガザの犠牲者がすでに1000人を超えました。

イスラエル出身のユダヤ人の歴史家イラン・パペが、「ガザにおけるイスラエルのジェノサイド的大量殺戮の1000人目の犠牲者の家族の方へ」と題した文章をエレクトロニック・インティファダに寄稿していますので、ご紹介します。

イラン・パペは、イスラエルのナショナル・イデオロギーであるシオニズムを批判するイスラエルの「新しい歴史家」の一人です。『パレスチナの民族浄化』（2007年）において、1948年、ユダヤ国家の建国にともなってパレスチナ人の身に起きたことは、「民族浄化」という言葉のあらゆる定義に照らして、「民族浄化」に他ならなかったことを明らかにしています。そして、パレスチナの地に、ヨーロッパ・ユダヤ人の国を創る以上、パレスチナの民族浄化は、シオニズムというプロジェクトに必然的かつ本質的に内包されていたと論じています。

2007年に来日した際の講演録が『イラン・パペ パレスチナを語る―「民族浄化」から「橋渡しのナラティヴ」へ』というタイトルで柘植書房新社から出ています。

パペはその政治的スタンスのゆえに、2007年、母国を去ることを余儀なくされました。アパルトヘイト体制からの南アフリカの解放が、アパルトヘイトによって抑圧される黒人だけではなく、レイシズム体制に反対する白人の願いであり夢もあったように、パレスチナをシオニズムの抑圧から解放することは、抑圧されるパレスチナ人だけでなく、パペのような、パレスチナ人とユダヤ人の共生を目指すユダヤ人が、生涯をかけてその実現のために闘う願いであり、夢でもあります。

「私は、私たちがシオニズムが敗れたあとの日々を夢見ることができれば、と願います。ヨルダン川から地中海までの地域で私たちの生を支配するシオニズムが打ち負かされて、私たちみながつづの生活を、私たちが憧れてやまない普通の生活、私たちが生きるに値する生活を送る日々のことを――

（「ガザにおけるイスラエルのジェノサイド的大量殺戮の1000人目の犠牲者の家族の方へ」より）

—————
ガザにおけるイスラエルのジェノサイド的大量殺戮の1000人目の犠牲者の家族の方へ

イラン・パペ

エレクトロニック・インティファダ

2014年7月27日

<http://1drv.ms/1AprtGL>

あなたの愛する者が誰であったのか、私はまだ知りません。数か月の女の子の赤ちゃんであったのか、幼い少年であったのか、祖父であったのか、あなたの子どもの一人だったの

か、それとも両親のいずれかであったのか。私は、あなたの愛する者の死をチコ・メナシェから聴きました。イスラエルの中心的ラジオ局、レシエト・ベートの政治コメンテーターです。

メナシェは、あなたの愛する者を殺害することは、ガザの居住区を瓦礫に変え、15万もの人々を自宅から追い出すのと同様、イスラエルの十二分に計算された戦略であり、この大虐殺でガザのパレスチナ人はイスラエルの政策に抵抗したいなどと金輪際、思わなくなるだろうと説明しました。

私がこれを聞いたのは、一応、上品な新聞ということになっているハアレッツ紙の7月25日付の紙面で、あまり上品とは言えない歴史家ベニー・モリスの、ここまでやってもまだ十分ではない、という言葉を読んでいるときでした。モリスは、これまでのジェノサイド的政策を「レフィースト」——心や精神の脆弱さ——と呼び、将来的にはこれをはるかに上回る大量破壊を要求しています。「ジャングルの中の屋敷」——エフド・オルメルト前首相がイスラエルを喩えて言った言葉です——を護りたければ、大量破壊こそがとるべき態度なのだと。

非人間的な荒れ野

そうです、残念ながらイスラエルのメディアも学者も、集団殺戮を諸手をあげて応援しているのです。この非人間的な荒れ野の中で、聞き取れる声はほとんどありません。私があるあなたにこれを書いているのは、自分は恥ずかしいと告げるためではありません。私はこの国家イデオロギーと絶縁して久しく、個人として、このイデオロギーと対決し、これを打ち負かそうと、私にできる限りのことをしてきました。でも、おそらく十分ではなかったのでしょうか。人間誰しも、時に臆病風に吹かれたり、利己主義に陥ったりして、そして、もしかしたら家族や愛する者たちのことを気にかけていたいという人間としてごく自然な欲求よっても、邪魔されてしまうのです。

しかし、それでも、私は今日、あなたにどうしても誓いを立てなければいけない、という思いに駆られています。それは、ナチ支配下の時代、殺し屋たちが父の家族に対しジェノサイドを行っていたとき、父が知るドイツ人の誰も父に対して進んでしようとはしなかった誓いです。あなたが悲嘆に暮れているこのときに、大した誓いだとは言えません。でも、私が申し出ることのできる精一杯のものです。何も言わないでいる、ということは選択肢にはありません。何もしないでいることは、選択肢ですらありません。

今は2014年です。ガザの破壊はしっかりと記録されます。パレスチナ人が、その身に起きた恐怖の物語を語るために苦闘を強いられた1948年ではないのです。1948年当時、パレスチナでシオニストが犯した罪の多くは隠蔽され、白日の下にさらされることはありませんでした。今日に至っても、です。ですから、私の第一の、シンプルな誓い、それは、真実を記録し、報せ、強く主張するということです。

私がかつて教えていたハイファ大学は、学生を募って、インターネットを使いイスラエルの

嘘を世界中に広めるということをしています、今は2014年です。この種のプロパガンダは通用しません。

ボイコットの誓い

もちろん、これでは不十分です。私は、このような罪を犯す国家をボイコットする努力を続けると誓います。ヨーロッパ・サッカー協会ユニオンがイスラエルを追放するとき、学界がイスラエルといかなる組織的関係をも結ぶのを拒否する時、航空会社がイスラエルへ飛ぶのをためらうとき、それぞれの団体が、倫理的姿勢のせいで短期的には損をしても、長期的には道徳的にも財政的にも得をするのだと理解するとき、そのときようやく私たちは、あなたの死者たちを尊重し始めたと言えるのです。

ボイコット、投資引上げ、制裁（BDS）運動は多くの成果を上げてきましたし、これからも弛まずその仕事を続けるでしょう。しかし、この運動が反ユダヤ主義であるというような偽りの主張や、政治家のシニシズムが依然、障害となっています。たとえば英国の建築家たちが、パレスチナの犯罪的植民地化の共犯者となる代わりに、イスラエルの建築家仲間らに道徳的態度をとらせようとしたことがあります。この尊敬すべきイニシアティヴは、最後の瞬間に妨害されてしまいました。

同じようなイニシアティヴがほかにも、ヨーロッパや合衆国の気骨のない政治家によって邪魔されました。しかし、私の誓いは、これらのハードルを乗り越えていくための努力の一環です。あなたの愛する者の記憶が、1948年とそれ以降のパレスチナ人の苦難の生々しい記憶とあわせて、私を前進させる力となるでしょう。

屠殺場

私はそれをすべて一人で勝手にやります。私は心の底から祈り、願います。シュジャイヤで、デイル・アル＝バラフで、あるいはガザ市で、パレスチナ人たちが、イスラエルの戦闘機や戦車や迫撃砲で目の前がみるみる屠殺場となっていくのを見つめているこの瞬間、あなたの人生のこの最悪の瞬間において、それでもあなたが、人間性に対して希望を失わないでほしいと。

この人間性にはイスラエル人も含まれます。声をあげる勇気はないけれど、私的にならその恐怖を語る者たちです。私の電子メールやフェイスブックの受信箱はそうした者たちからのメールで溢れかえっています。そして、ガザの漸増的ジェノサイドに対し公に反対の声をあげる、ごく一握りのイスラエル人たちもです。

それにはまた、まだ生まれてはいない者たちも含まれます。この子たちはひょっとしたら、16歳のパレスチナ人の少年が生きのまま焼き殺されても、心動かされたり、政府や軍や信仰に対する信念が打ち砕かれたりもしないまでに、揺りかごから墓場まで、パレスチナ人を非人間化することを教えるシオニズムの洗脳マシーンを逃れることができるかもしれませぬ。

打ち負かして

彼らのために、私のために、そしてあなたのために、私は、私たちがシオニズムが敗れたあとの日々を夢見ることができれば、と願います。ヨルダン川から地中海までの地域で私たちの生を支配するシオニズムが打ち負かされて、私たちみながつつうの生活を、私たちが憧れてやまない普通の生活、私たちが生きるに値する生活を送る日々のことを。

だから、私は今日、誓います。たとえ友人たちやパレスチナの指導者たちであっても、彼らに気を逸らされたりはしないと。パレスチナ人指導者たちは愚かにも、潰えて久しい「二国家解決」に今だに望みを託しています。人がパレスチナを体制変革することに深く関わりたいと強く思うとすれば、それは、平等な人権、市民権、そして、パレスチナという彼らが愛する祖国の内外にいる、シオニズムの現在の犠牲者たち、過去の犠牲者たちすべてに対する完全補償、これらを求めて闘うためにほかなりません。

あなたの愛する者が誰であれ、安らかに眠ってください。その死が無駄ではなかったと知ってください。その死に対して復讐がなされるからではありません。私たちにこれ以上の流血は必要ありません。邪悪なシステムに、人間性と道徳性の力によって終止符を打つ方法があると私は今も信じています。

正義とは、あなたの愛する者やその他大勢を殺した殺人者を法廷に連れて来ることを意味します。私たちは、なにがなんでも、イスラエルの戦争犯罪を国際法廷で裁くということを実現しなければなりません。

それは気の遠くなるほど長い道のりです。時として私でさえ、この非人間性を終わらせるためにハードパワーを行使する勢力の一部になりたいという衝動に駆られます。しかし、私は自分に誓います。正義のために働くことを。完全な正義、修復的正義のために働くことを。

これが私に誓うことのできることです。私は、パレスチナにおける民族浄化が次の段階に進むこととガザにおけるジェノサイドを阻止するために闘います。

[翻訳：岡 真理]

To the family of the one thousandth victim of Israel's genocidal slaughter in Gaza

Ilan Pappé

The Electronic Intifada

27 July 2014

<http://electronicintifada.net/content/family-one-thousandth-victim-israels-genocidal-slaughter-gaza/13648>

I do not know yet who your loved one was. She might have been a baby a few months old, or a young boy, a grandfather or one of your children or parents. I heard about your loved one's death from Chico Menashe, a political commentator on Reshet Bet, Israel's main radio

station.

He explained that the killing of your loved one, as well as turning Gaza neighborhoods to rubble and driving 150,000 people from their homes, is part of a well-calculated Israeli strategy: this carnage will destroy the impulse of Palestinians in Gaza to resist Israeli policies.

I heard this while reading in the 25 July edition of the supposedly respectable Haaretz the words of the not so respectable historian Benny Morris that even this is not enough.

He calls the genocidal policies so far “refisut” ? feebleness of mind and spirit. He demands far more massive destruction in the future with the knowledge that this is how you behave if you want to defend your “villa in the jungle,” as former Israeli Prime Minister Ehud Barak described Israel.

Inhuman wilderness

Yes, I am afraid to say the Israeli media and academia are fully behind the massacre apart from few, hardly audible voices in this inhuman wilderness. I am not writing this to tell you that I am ashamed ? I long ago dissociated myself from this state ideology and do all I can as an individual to confront and defeat it. Probably it has not been enough; we are all inhibited by moments of cowardice, egotism and maybe a natural impulse to take care of our family and loved ones.

And yet I feel the urge today to make a pledge to you, which none of the Germans my father knew during the time of the Nazi regime was willing to make to him when the thugs committed genocide against his family. This is not much of a pledge at your moment of grief, but it is the best I can offer and saying nothing is not an option. And doing nothing is even less than an option.

This is 2014 ? the destruction of Gaza is well documented. This is not 1948 when Palestinians had to struggle hard to tell their story of horror; so many of the crimes Zionist committed then were hidden and never came to light, even until today. So my first and simple pledge is to record, inform and insist on the truth.

My old university, University of Haifa, has recruited its students to disseminate Israel's lies all over the world using the Internet, but this is 2014 and propaganda of this kind will not hold water.

Pledge to boycott

But surely this is not enough. I pledge to continue the effort to boycott a state that commits such crimes. Only when the Union of European Football Associations throws Israel out, when the academic community refuses to have any institutional ties with Israel, when airlines

hesitate to fly there, and when every outfit that may lose money because of an ethical stance in the short-term understands that in the long run it will gain both morally and financially ? only then we will begin to honor your loss.

The boycott, divestment and sanctions (BDS) movement has had many achievements and continues its tireless work. The obstacles still include the false allegation of anti-Semitism and the cynicism of politicians. This is how an honorable initiative by British architects to force their colleagues in Israel to take a moral stance rather than be accomplices in the criminal colonization of the land was blocked at the last moment.

Similar initiatives were sabotaged elsewhere by spineless politicians in Europe and the United States. But my pledge is to be part of the effort to overcome these hurdles. The memory of your loved one will be the driving force, together with the vivid memory of the suffering of the Palestinians in 1948 and ever since.

Slaughterhouse

I do it all egotistically. I really pray and hope that in this worst moment of your life when Palestinians stand in Shujaiya, Deir al-Balah or Gaza City, gazing at the slaughterhouse created by Israeli warplanes, tanks and artillery, you would not lose hope in humanity.

This humanity even includes Israelis, those who do not have the courage to speak but who express their horror in private as my overflowing email and Facebook inboxes attest, as well as the small handful who demonstrate publicly against the incremental genocide in Gaza.

It also includes those not born yet who perhaps will be able to escape a Zionist indoctrination machine that teaches them, from cradle to grave, to dehumanize the Palestinians to such a level that the burning alive of a sixteen-year-old Palestinian boy fails to move them or shatter their belief in their government, army or religion.

Defeated

For their sake, mine and yours, I wish we can also dream of the day after ? when Zionism will be defeated as the ideology that governs our lives between the Jordan river and the Mediterranean sea and we all have the normal life we crave for and deserve.

So I pledge today not to be distracted even by friends and Palestinian leaders who still foolishly pin their hopes on the long-gone “two-state solution.” If one has the impulse to be involved in bringing regime change in Palestine, the only reason to do this is for a struggle for equal human and civil rights and full restitution for all those who are and were victimized by Zionism, inside and outside the beloved land of Palestine.

May whoever is your loved one rest in peace knowing that their death was not in vain ? not

because it will be avenged and revenged. We do not need more bloodshed. I still believe there is a way of bringing evil systems to an end with the power of humanity and morality.

Justice also means bringing the murderers who killed your loved one and so many others to court, and we must pursue bringing Israel's war criminals to trial in international tribunals.

It is a far longer way and, at times, even I feel the impulse to be part of a force that uses hard power to end the inhumanity. But I pledge myself to work for justice, full justice, restorative justice.

This is what I can pledge ? to work to prevent the next stage in the ethnic cleansing of Palestine and the genocide of Palestinians in Gaza.

The author of numerous books, Ilan Pappé is professor of history and director of the European Centre for Palestine Studies at the University of Exeter.

以上